

# 全国盲ろう教育研究会 会報 第22号

2024年3月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

かぐわしい沈丁花の香りが春の訪れを告げるころとなりました。豊かな四季の移り変わりをさまざまな感覚で感じ取ることができる自然環境を大切にしたいと思います。

昨年8月に開催した定期総会にて、研究会発足時から会長として研究会を牽引してきた中澤から雷坂に会長がバトンタッチされ、役員・事務局にも新メンバーが加わりました。引き続きまして、当研究会へのご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。

## ●第21回研究協議会の報告

視覚と聴覚の両方に障害を併せ有する「盲ろう児・者」の教育及び福祉に関わる多様な事柄を研究し、その向上に寄与することを目的として2003年に発足した当研究会は、今年度をもって丸20年となりました。

2023年8月5日（土）に開催した研究協議会冒頭の中澤会長の挨拶全文を以下に掲載いたします。

### 【開会の挨拶】

全国盲ろう教育研究会第21回研究協議会にご参加いただいた皆様、本研究会会長の中澤恵江です。アメリカアリゾナ州のフェニックスの地から皆様にご挨拶申し上げます。

皆様、ご参加いただきまして、ありがとうございます。本日は、新型コロナウイルスの感染リスクを鑑みてのオンライン開催となりますが、第21回の研究協議会を開催できますことを大変ありがたく思っております。

本研究会は、研究紀要の発行や研究協議会の開催、ホームページ等を通して、教育実践の報告や交流、最新情報の提供等を図ってまいりました。



研究協議会は、盲ろう教育に関わる学校の教職員だけではなく、盲ろう児・者のご家族、盲ろう当事者、研究者、療育・福祉・医療等関係する諸機関や諸団体の皆様等、様々な立場の方々にご参集いただき、発足来、毎年度、開催し、今日に至っております。研究協議会では、盲ろうの子どもたちが保護者の方と一緒に参加し、子どもたちの活動を展開してきたことも大きな特徴の一つです。

今年度の研究協議会は、杏林大学医学部付属病院アイセンターロービジョンルームの新井千賀子氏に「盲ろう教育と医療機関におけるロービジョンケア～教育と医療の連携～」と題してのご講演をお願いしております。また、早期支援から、学校卒業後の実践まで、各地の多岐にわたる実践報告、そして、企業様からの情報提供やリレートークまで、多彩なプログラムを用意いたしました。

ご参加いただいた皆様にとって、充実した時間になりますこと、教育実践や取組の参考になりますことを期待しております。

最後になりますが、少し、お時間をいただき、お話をさせていただきます。

2003年（平成15年）、時代の大きなうねりと教育実践の積み重ね、そして、切実な要望に後押しされるように、本研究会は発足いたしました。

当時の全国盲学校長会会長、全国聾学校長会会長、国立特別支援教育総合研究所理事長、全国盲ろう者協会理事長をはじめ、関係する30名程の賛同を得て、2003年5月20日に「全国盲ろう教育研究会設立趣意書」を公表し、今は亡き、塩谷治氏等、設立準備会のメンバーが中心となって、本研究会発足の準備を進めました。そして、同年7月25日、筑波大学附属盲学校において、全国盲ろう教育研究会設立総会・第1回研究協議会を全国から100名程の方の参加により開催し、設立総会での承認を受けて、熱気にあふれる中で、盲ろう児・者の教育及び福祉に関わる多様な事柄を研究し、その向上に寄与することを目的として発足いたしました。

その時から、丸20年、皆様に支えられながら、会長として、全国各地で積み重ねられている盲ろう児・者への支援の実践や研究を結集し、実践と情報を分かち合い、盲ろう児・者の教育と福祉へ貢献することに努めてまいりました。

私は、現在、アメリカに在住していること、体力的に無理ができないといったことから、20年という区切りをもって、会長職を降りたいと考えております。改めまして、今日まで支えていただいた皆様に心よりお礼を申し上げます。

研究会の活動が展開するために必要なことは、日本各地で盲ろうに関わる実践を続けている方々が、より多くこの研究会に参加し、これまで個人のなかで閉ざされていた悩み、課題、失敗、成功を同じ仲間と分かち合い、次のステップを共に踏み出すことだと考えております。一人でも多くの方々の参画を期待しております。



| 月齢     | 診断・Aさんの様子                           | 関連機関とのつながり  |
|--------|-------------------------------------|---|
| 0 : 0  | 新生児聴覚スクリーニング検査                      | 母、聴覚障がい支援について調べ始める。父は以前障がい福祉の窓口を担当しており、制度や障がいについての理解があった。 |
| 0 : 3  | ABR検査 105dBスケールアウト                  | 難聴児療育「ぴよんぴよん教室」利用開始<br>聴覚支援学校の早期教育相談                      |
| 0 : 4  | 補聴器の装用を開始<br>重度の視力障がいありと診断          | 全国盲ろう教育研究会<br>ふうわの会                                       |
| 0 : 5  |                                     | 視覚支援学校「ぱんだ教室」   |
| 0 : 7  |                                     | 訪問リハビリ利用開始  |
| 0 : 8  | 首がすわる 寝返り                           |   |
| 0 : 9  | 「レーベル先天黒内障」と診断                      |   |
| 0 : 10 | 支えられて座位がとれる                         |   |
| 0 : 11 | 眼鏡の装用を開始<br>光るおもちゃ、赤いものへのリーチングが見られる | (筑波大学附属視覚特別支援学校訪問)  |
| 1 : 3  | 人工内耳手術<br>集中していると一人で座れる             |   |
| 1 : 9  | 操作的な遊びをするようになる                      | 指定相談支援利用開始  |
| 2 : 0  |                                     | 児童発達支援利用開始<br>保育園（小規模・看護師配置）入園予定                          |

人工内耳の手術後、劇的に聴こえ方が変わって行動が変わったといったことはわからないものの、好きな太鼓の音やスピーカーから流れるリズムカルな音楽に対して集中しているような様子が見られている。

#### 4. ぱんだ教室でのAさんとのかかわり

- 初回訪問 R4年3月（生後5カ月で来校）
  - R3年度 3学期 1回
  - R4年度 1学期 4回・2学期 5回・3学期 4回
  - R5年度 1学期 8回

合計22回

- 「親子遊び」過ごし方
  - ① いつものマットへ
    - まずは、マットに座り、シャカシャカ素材を確認する
  - ② おあつまり（はじめの歌、お名前呼び）
  - ③ 季節のうた
    - 楽器を鳴らして参加
  - ④ 自由遊び
    - ハンモック、エアトランポリン等で遊ぶ
    - タンゴドラムが今のお気に入り
  - ⑤ おかえり

\* ぱんだ教室での活動の様子、ご家庭での様子について動画で紹介いただいた。

○ Aさんの好きな遊び・おもちゃ  
＜いつものマット＞



＜ハンモック＞



＜振動するおもちゃ＞



＜たいこ・タンブリン＞



＜タンゴドラム＞



＜エアトランポリン＞



## 5. 今後に向けて ～ホームサインを練習中～

今、家庭でホームサインを練習している。たとえば、

「ごはん」→あごをさわる

「おむつ替え」→おむつのあたりをさわる

「ママ」→小指をさわる

「パパ」→親指をさわる

「ちょうだい」→手をあわせパチパチと叩く

「お風呂」→手を持って反対の腕にゴシゴシ

今後、児童発達支援センター、保育園、聴覚支援教室に行く予定になっているので、今までのようにぱんだ教室に来るのは難しくなりそうだが、これからもAさんの成長をぜひ見守らせていただきたい。

## 6. 最後に

お母さまとのやりとりで、印象深かった言葉をご紹介させていただく。

- ・ 平均的な子育てとの違いが大きく、不安な気持ちでいっぱいだったが、「この子に合った育て方」を探せばいいんだ、と思えるようになった。
- ・ 各方面、関連機関とのつながりができ、チームで関わっていただいている安心感がある。
- ・ Aには、これから通所等をとおして、より対人興味を高め、心を発達させてほしいと願っている。
- ・ コミュニケーションの楽しさを知り、まずはホームサイン、さらには言語の獲得をめざしたい。

このように、愛情たっぷりで健やかに成長しているAさんの育ちを今後も見守っていきたい。

## 実践報告Ⅱ概要

「小学部入学から今日までのA児との関わりの中で

学んだこと、大切にしてきたこと

—『～が楽しい』、『～が大好き』といった思いがことばの育ちの根っこ—

筑波大学附属視覚特別支援学校 教諭 塚田 直也 氏

### 1. 入学当初のA児について

#### (1) 基本情報

- ・ 本校幼稚部修了後、小学部特別学級に入学。現在小学部2年生。
- ・ 未熟児網膜症（左右：光覚弁）、軽度難聴（裸耳：20～35dB）。
- ・ 聴力活用の経過

幼稚部年少児：70～80dB程度（観察）、補聴器を装用。

音への気付きを育む指導。

幼稚部年長児：30～40dB程度（観察）。

好きなおもちゃの音に気付き音源に向かう。

補聴器装用時と裸耳のときと同じような反応が見られることやA児が補聴器を装用せずに音を聴くことを好む様子が見られることを踏まえ、医療機関と相談の上、補聴器を装用せずに過ごすことにした。

※聴覚を活用し、聞こえているように見えるが、活動中での反応から明瞭にははっきりと聞こえているわけではないと考えられる。

#### (2) 好きなこと

- ・ キーボードの音、デモ演奏の音楽、音の出る絵本から流れる音楽など、音や音楽を聴くこと。
- ・ 身近な大人の歌声を聴いたり、身近な大人にくすぐられたりすること。
- ・ 「高い、高い」、「おんぶ」など、身近な大人と身体接触を伴うダイナミックな遊びをすること。

- ・鉄棒につかまり、回転したり、逆立ち姿勢になったり、斜面をよじ登るなど、様々な抵抗を実感できるような動きをすること。

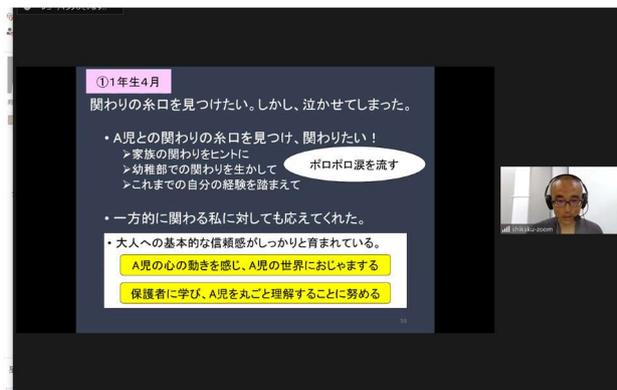
### (3) 人との関わり、コミュニケーション

- ・「右手首を握った左手でたたく⇒『糸巻の歌を歌ってほしい』」
- ・「右頬を右手人差し指で触る⇒『森のくまさんを歌ってほしい』」
- ・「左手の手のひらを右手の人差し指で触る⇒『お茶を飲みたい』」など、独自の身振りサインで要求を表現する。身振りサインは、お母さんとのやりとりを通して、つくり上げてきたA児の大切なことばである。

## 2. 指導の経過

### (1) 関わりの糸口を見つけたい。しかし、泣かせてしまった。(1年生：4月)

A児との関わりの糸口をつくるために、父親とA児との関わりを参考にし、A児が好きな歌を歌いかけながら、「高い、高い」をした。A児は無表情であったが、私が「もう一回する？」と尋ねると、右手を上下に動かした。この仕草を「もっとやって」という思いだと捉え、再度、「高い、高い」をした。その後、A児の表情を見ると、涙を浮かべ、悲しそうな表情を浮かべていた。私が、「ごめんね。」と謝ると、A児は、お尻を床につけた姿勢で、足を前後に動かし、その場を立ち去った。



#### <考察>

私が考えた「A児の好きなこと」を用いて、一方向的に関わってしまったこと、A児の心の動きを理解しようとせずに関わってしまったことを大いに反省した。また、そんな私に対しても、懸命に応答しようとするA児の姿から、A児には「人を求める心」、「人とつながろうとする心」がしっかりと育まれていることを実感した。まずは、A児の心の動きを感じ、A児に合わせて時間をかけて関わっていきたいと考えた。

なお、年度当初、何回かお母さんに来校いただき、A児との関わり方や教室での過ごし方などについて意見もらったり、年間を通して、連絡帳や電話、口頭での会話でA児の育ちを確認したりしたことが、A児の心の内を理解することの支えになった(なっている)。

### (2) 「もっと～したい」という思いから身振りサインが生まれた。

(1年生：6月)

同僚教師とA児との関わりを参考にA児がやっていることをそばで見守りつつ、少しずつA児の指先、腕、足といった身体に触れたり、A児が聴いている音楽のリズムに合わせて床をたたいたり、A児の身体をさすったりした。

こうした関わりを続けると、A児が私の背中にくっつくことで「おんぶしてほしい」という思いを伝えるようになった。このとき「おんぶする？」や「も

う一回する？」などと尋ねながら、A 児の手に触れるようにした。すると、A 児は手を上下に動かすとともに、腕や足に力を入れ、おんぶをされる態勢となり、「もっとおんぶして」という思いを表現する様子が見られた。

おんぶを求めるようになった後、私は、A 児を抱きかかえて左右、前後に揺さぶる遊び（ブランコ遊び）を試みた。A 児は声を出して満面の笑みを浮かべた。初めは、私に近付いたり、手を伸ばしたりして「もっとブランコ遊びをやって！」と要求した。徐々に、ブランコ遊びの種類に応じて以下のような伝え方が生まれてきた。

- ・「横向きに抱きかかえられて、左右に揺れたい」ときは、私と向き合い、私の両手を握り前後に動かす。
- ・「前向きに抱きかかえられて前後に揺れたい」ときは、私に背中を向け、私の両手を握り前後に動かす。 など…

#### <考察>

A 児は「もっと～したい」と思うに値するもの、つまり、「楽しい」、「大好き」といった自分にとって価値あるものを発見する力（自我）を獲得し、自分の身体を駆使して、その思いを表現する力を育ててきていることを感じた。

A 児にとって価値あるもの（遊び等）を見つけ、分かち合い、つくっていくことがことばを育てるための大切な指導ではないかと考えた。

#### (3) 『この歌』の『ここ』を歌って! という思いから新たなやりとりが生まれた。 (1年生:10月)

ある日、A 児が手を上下に動かし、「ながぐつマーチを歌って」という思いを伝えてきた。私が前奏から歌い始めると、A 児は手をたたき「おしまい!」と伝えた。私が歌うことを止めると、再び、手を上下に動かした。そこで、再度、「ながぐつマーチ」を歌いかけたが、手をたたき、「おしまい」と伝え、今度は「あああ。」と怒ったような声を出した。

こうしたやりとりが他の歌でもあり、A 児の伝えたいことが分からず、A 児を怒らせてしまう日が数週間続いた。「～の歌を歌ってほしい」という要求の「～」は、間違っていないはずなのだが、A 児は納得しない。A 児は歌の名前以外に何かを伝えているはずだと感じ、A 児の日ごろの様子をもとに、A 児が本当に伝えたいことについて考え、悩む日々が続いた。

そんなある日、A 児が音の出る絵本を操作し、曲の一部分を繰り返し聴き、満面の笑みを浮かべている姿が目にとまった。A 児は、『～を歌ってほしい』⇒『おしまい』という一連の身振りサインで、曲の一部分、特にリズムカルな伴奏部分を繰り返し歌ってほしいと伝えていたのではないかと考えた。

早速、その日、『ながぐつマーチを歌ってほしい』⇒『おしまい』と身振りサインをしてきたときに、伴奏部分を繰り返し、リズムカルに歌いかけてみた。すると、A 児は満面の笑みを浮かべ、声を出して笑った。この日以来、既習の身振りサインを自在に使って『この歌』の『この』部分を歌ってほしい」という要求を何度も伝えるようになり、次第に、私の歌声に合わせて、「つつ、つつ。」「ああ、ああ。」などと声を出すようになった。

#### <考察>

これまで A 児は、音の出る絵本やキーボードを自在に操作し、テンポや音

量、曲を変え、自分の好きな部分を聴くことを楽しんできた。一方で、私に対しては、「～を歌ってほしい」と一つの歌を単純に歌うことを要求するのみであった。

しかし、「～を歌ってほしい」という要求や身振りサインが増え、何度もやりとりをすることを通して、A児の心の中に何らかの思い（「この人は自分が伝えたいことを分かろうとしてくれているな」、「もっとこの人と歌で楽しみたいな」など）が生まれ、これまで獲得した身振りサインを駆使して新たな要求を表現するようになったのではないかと感じた。

歌の楽しみ方が多彩化したこの時期、音声表出が増えたり、私の音声をまねたり、また、「トゥルルル！」という声で「抱っこしてグルグル回転やって」と要求するようになった。

#### (4) 「もっと～したい」という思いから身振りサインをつくり、教える。

(2年生：4月～現在)

今年度の指導では、A児に新たな身振りサインを教えることを少しずつ増やしている。これまでは、A児の言動から「こんなことを伝えたいのだろうな」と想像し、そのときのA児の身体の動きや向きを生かして、自然に身振りサインへと発展していくように関わってきた。そのことにより、身振りサインが増えてきた一方で、A児の自発的な動き（生活の中での自然な仕草）には限りがあり、A児の「伝えたいこと」の量に追い付かない状況になってきた。

また、一年間の関わりを通して、徐々にA児が私に対して心を向け、安心して関わってくれるようになってきたと感じたことも、身振りサインを教える指導を増やした理由である。

新たな身振りサインを教えるときは、まず、一つの遊びや歌に十分に取り組み、とことん一緒に楽しむことを大切にしている。「ゆらりんこ」という歌を歌いかけながら、シーツブランコやハンモックを揺らす活動は、1か月半程度取り組んだ後に、「ゆらりんこ」を表す身振りサインを教えることとした。身振りサインを教えるときは、A児の手を握り、身振りサインとして身につけてほしい動きを伝えながら、「ゆらりんこ、やって！」と言葉をかけた。A児は数回そうしたやりとりを行うと、新たな身振りサインを覚えて、自発的に表現できるようになってきた。

#### <考察>

最近では、A児の伝えたいことが急激に増え、A児自身がすでに身につけている身振りサインを活用して、新たな要求を表現するようになってきている。また、「右手を伸ばし、左手の拳で右手の肘をたたく⇒『ゆらりんこを歌いながら、ゆらゆらして』」、「左手を伸ばし、右手の拳で左の肘をたたく⇒『お風呂に入りたい』」のように左右を使い分けるようになってきた。

A児の「伝えたいこと（A児にとって価値あるもの）」を大切に育み、それらを表現する手段をともにつくっていくことが、今後の私の課題であり、A児のねがいだと考えている。

### 3. まとめ ～A児との関わりの中で学んだこと、大切にしてきたこと～

#### <学んだこと>

- ・「～が楽しい」、「～が大好き」という自分にとって価値あることを発見し、十分に打ち込むことを通して、「～を伝えたい」というねがいが生まれ、ことばにつながる。また、「～が楽しい」、「～が大好き」といった思いは、子どもと大人との関わりを通して、より豊かになっていくこと。
- ・身振りサインや発声といった表現手段は、大人が教え込むものではなく、まずは、大人が子どもの心の動きを感じ、その心に共感して、子どもと一緒につくっていくものであること。
- ・子どもがどのような歴史を歩み、今を生活しているのか、今どのような生活を送っているのかを知ること、知ろうと努力を続けることは、子どもとの関わりの糸口を見つけ、つくるときに欠かせないこと。

#### <大切にしてきたこと>

- ・A児の世界を知り、A児の世界におじゃまさせてもらえるように、A児のやりたいことや好きなこと、身振りサインを育んできた経過など、A児の生活や育ちの歴史を保護者に尋ね、知り、学ぶこと。
- ・A児の身振りサインやしぐさ、表情、発声など、A児からの発信を見逃さないようにし、それにしっかりと応え、ときには、その発信が意味していることの推測をA児に確かめるというやりとりをしながら、内面世界を探り、内面世界に共感すること。
- ・「～が楽しかったな」、「～が面白かったな」と実感し、「もっと～したいな」といった期待感を育むために、関わり方に変化を付けたり、遊びの始まりと終わりを明確に伝えたりすること。
- ・身振りサインを教える前に、その対象（内容）となる遊びを十分に楽しむ時間（期間）を設けること。複数の場面でその遊びを求めたり、楽しんだりする様子が見られるようになったときに、A児の今の力でできる動きを用いた身振りサインを教えたこと。

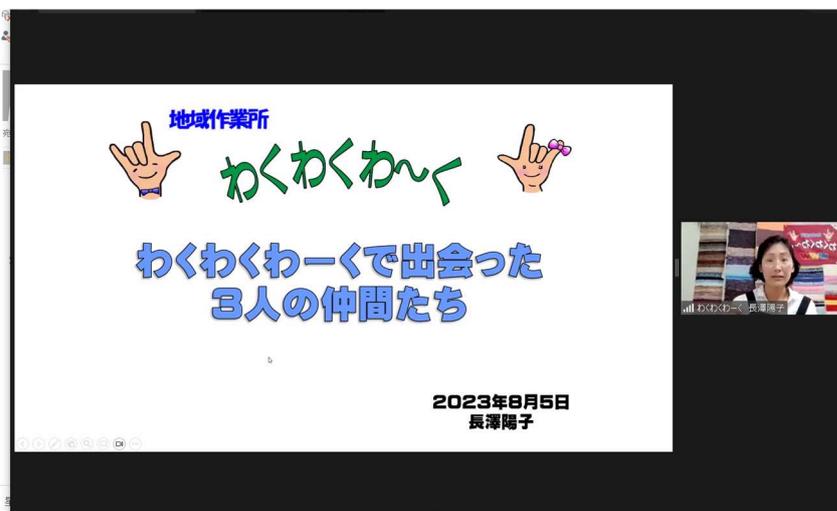
## 実践報告Ⅲ概要

### 地域作業所わくわくわーくの素敵な仲間を紹介します

地域作業所わくわくわーく 職員 長澤 陽子 氏

地域作業所わくわくわーくの楽しい盲ろう3人組（Dくん、Rさん、Tくん）と過ごす日々についての紹介があった。

Dくんは、感情や興味を簡単には表してくれないのものの、だからこそ彼が笑うとこちはとっても嬉しくなる。Rさんは、周りの人を自分のやりたい方向に巻き込むのがとっても上手。私はいつの間にかRさんのペースにはまってしまう。Tくんはツンデレ、意に沿わないと、つい物に当たってしまうが、本当は甘え上手。



3名の盲ろうの方の活動の様子等について、映像を交えながらご報告いただきました。

### 【地域作業所 わくわくわーくのホームページより】

目が見えない、見えにくい  
耳が聞こえない、聞こえにくい  
盲ろうの世界を想像してください。  
行きたい時に、行きたい場所に安心して行くこと。  
おしゃべりしたい人と思う存分会話を楽しむこと。  
テレビやラジオ、雑誌を楽しむこと。  
周りの様子を小耳にはさんだり、偶然目にした物事に驚いたりすること。  
盲ろう者には難しいことがたくさんあります。  
不便さを痛感することもあります。  
でもそれは「できない」ことではありません。

ひとりひとりの力は小さくても、ひとり、ふたりと仲間が集まり、盲ろうという世界を理解することで「できる」ことはたくさん、たくさん増えるのです。

みんなが、楽しく、わくわくしながら、わくわく過ごせる作業所を目指します。

いつでも、仲間と会えて、楽しい作業をして、困ったことを相談できて楽しいことがいっぱいある。そして、楽しみながら誰かの役に立ったり、生きていることが嬉しくなる。そんな作業所を目指しています。

#### ◆「わくわくわーく」の歴史

目と耳にあわせて障害のある盲ろう者が地域の中で暮らし、自分らしさを発揮して生きるために、働く場の確保と情報を得ることができコミュニケーションできる場所を作りたい！在宅生活を余儀なくされている盲ろう者に活動の場を与えたい！そんな思いから目と耳に障害のある人たち、スタッフ、ボランティア、運営委員など、そこに集うすべての人達が互いに助け合い、それぞれの生き方を充実させていく場として、2007年4月1日に横浜市障害者地域作業所「わくわくわーく」は設立されました。

#### ◆ NPO 法人わくわくわーくについて

2007 年 4 月 1 日に発足した「地域作業所わくわくわーく」の活動を引き継ぎ、2013 年 2 月 14 日に NPO 法人わくわくわーくが設立されました。現在は横浜市地域活動支援センター作業所型、地域作業所わくわくわーくを運営しています。

### 情報提供概要

盲ろうの方々への支援情報に関する、  
医療に従事する企業としての取り組み  
日本調剤株式会社 薬剤企画部長 長島 雄一 氏

#### 1. 本日に至る背景

日本調剤は全国に 726 店舗ある調剤薬局を運営している。2022 年 4 月にグループ理念を策定、『すべての人の「生きる」に向き合う』を掲げた。そして、持続可能な社会への貢献と継続的な企業価値の向上を果たしていくために、当社グループは 21 のマテリアリティ（重要課題）を策定した。

その一つに「難病や障害などの医療福祉領域への支援」という使命がある。我々活動チームは特に「小児・難病・障害児とそのご家族」を対象とし、医療や福祉、教育の手が届いていない領域を医療に従事する企業として支援することを目標に取り組んでいる。

本日は、盲ろう者・盲ろう児の支援に関し、我々のチームが関わってきた活動内容について共有させていただきたいと思う。また、意識調査や市場調査の結果についても報告させていただく。

#### 2. 活動内容

- ・特別支援学校、支援団体、医療機関、行政を訪問し、盲ろう分野に関する意見交換を行った。
- ・盲ろうを一般生活者にも知っていただくため 2 点のリーフレットを全国約 700 店舗で設置した。
- ・盲ろう医療情報ネットの周知拡大のため、対象地域の 334 薬局で店内掲示をした。
- ・700 店舗での活動をホームページに掲載し、トップメッセージを社会に発信した。
- ・これら活動に対する薬局スタッフへの意識調査を行った。
- ・盲ろうに関する認知調査を、電子お薬手帳を利用している 30 万人の弊社会員を対象に実施した。
- ・東京都 23 区に対して、区民からの相談に対して盲ろう医療情報ネットのご案内を提供いただくよう訪問した。
- ・オンラインで薬の説明が行えるようになり、薬剤師の手話によるお薬説明やセ

セミナーを実施した。

- ・本年度は様々な団体様と連携し、セミナーや交流会の企画をサポートしたく思っている。

### 3. 店舗における活動結果

- ・店舗における周知啓蒙活動では、薬剤師をはじめとした薬局スタッフの盲ろう者への支援、啓蒙への関心の高さがうかがえた。以前より盲ろう者を知っている弊社スタッフが33%いた。盲ろう者支援の活動に対して協力したいというポジティブな意見も69%あった。これは盲ろう者や盲ろう児のご家族は、医療と関わる可能性が高く、調剤薬局のスタッフは盲ろう者やそのご家族と接する機会があること、また医療従事者としてのマインドも一因である。

### 4. 市場調査における結果

#### <盲ろうの認知状況>

- ・「初めて聞いた」と回答した方が50%、1年以上前から知っている方が26%、「盲ろう」という言葉と意味を知っている割合は28%。
- ・テレビがきっかけで「盲ろう」を知った方が最多、次いでインターネット、日本調剤の店舗で、盲ろうリーフレットに気付いた方もいる。
- ・「その他」に記入されたキーワードを見ると、「学校」「授業」で認知したケースや医療・福祉などの仕事関係で認知した方が多い。

#### <盲ろうとのかかわり状況>

- ・知り合いにいらっしゃるという方は「盲ろう者」5%、「盲ろう児」は1%。
- ・知り合いにいらっしゃる盲ろう者のうち20%が盲ろう児であった（盲ろう児が増えている？）。

#### <一般生活者から見た課題>

- ・「社会の理解」が重要という回答が最多。次いで、「教育の充実」や「福祉の充実」を重要と考える方が多い。
- ・自身の家族に盲ろう児がいると仮定した場合、頼るところとしての回答は「役所の行政窓口」が最多、「通学している学校」と回答した方は5%、頼れるところが無いと思う方が5%いる。

#### <盲ろう者とのコミュニケーション方法の認知度>

- ・「点字」「手話」は85%の方が知っている。その他についても10%以上認知されている。
- ・盲ろう者と特有のコミュニケーションについての言葉としての知名度が上がってきている？

### 5. 23区訪問活動における結果

- ・盲ろうというワードだけでは、なかなか話が通じない。具体的な支援内容にたどり着かない。

活動内容:行政へアプローチ

■区役所へのアクション → (東京23区:全区役所訪問を実際に行った)

- ・盲ろう者に支援情報が届いていない現状と、行政は頼られる存在であることを説明した
- ・盲ろう者からの相談事例や支援状況についてヒアリングを行った
- ・盲ろう者や盲ろう児、そのご家族へ情報提供をする手段について提案を行った

区役所、市役所などの障害や福祉の窓口 5,615  
ご支援希望は2,477件(支援情報のお困りごとを記入した方) 42.7%

<盲ろう者へのアンケート結果>

|           |       |
|-----------|-------|
| 情報は届いていない | 61.5% |
| 情報は届いている  | 38.5% |
| 情報は届いていない | 0%    |

※調査:19区訪問・調査対象:「盲ろう者の情報入手に関する現状と課題」

「盲ろう」支援情報ネットワークを相談者が果たした紹介してほしい

【課題】  
「盲ろう」という言葉だけでは、なかなか話が通じない。  
具体的な支援情報にたどり着かない。  
個人の盲ろう者の実情については支援団体との連携はあるが、「盲ろう児」については学校や介護事業所頼りなイメージが強い。

- ・盲ろう者の支援については支援団体さんとの連携はあるが、盲ろう児については学校や介護事業所頼りのイメージが強い。

## 6. 今後の活動について

調剤薬局は医療機関としては一般生活者の接点としての距離が近く、盲ろうを生きる当事者やそのご家族との接点を持ちやすいと思う。

また、盲ろうの活動においては医療の企業であるからこそ担える、情報発信や認知活動、調査活動があると思う。

患者さまとの直接的な接点に留まらず、複層的に盲ろう者や盲ろう児、そしてそのご家族の「生きる」とつながっていききたい。

## リレートーク概要

盲ろうに関する多様な報告を持ち合い、情報を共有、交流できるような場として、設定しました。当事者2名を含め、以下の報告がありました。

### 1. 山梨盲ろう教育資料デジタル・アーカイブ化報告 山梨県立盲学校 河西 晃 氏

山梨県立盲学校では戦後まもなく、日本で初めてといわれる、盲ろう児へ教育実践が行われた。その当時の教材や記録、日誌などの劣化を防ぐとともに現在に生かすためにデジタル・アーカイブ化を進めてきたが、一定の形となった。



### 2. 盲ろう教育関連 新刊本の紹介

#### — 「特別支援教育免許シリーズ 複数の困難への対応」について —

横浜訓盲学院 中川 はすみ 氏  
徳島聴覚支援学校 長尾 公美子 氏

学生や教員を対象とした盲ろう教育に関する内容をまとめた本『複数の困難への対応』が、建帛社の特別支援教育免許シリーズから発刊された。生理・病理の項目は松永達雄先生、心理の項目は河原麻子先生、教育課程・指導法の項目は中川・後石原先生、重度障害児者の生涯発達支援の項目は長尾がそれぞれ担当し、徳島での実践も掲載した。



### 3. 近況報告

おざき まさ 氏

ろうがっこう そつぎょうして 10ねんいじょうが すぎました。

へいじつは さぎょうしょの いっぽのいえに いてて しごとを がんばっています。しごとを がんばって いることや さいきんの ぼくの どの ちの すごしかたを ほうこく します。

【事前に本人が作成した紹介】

当日は、オンラインにて、手話に音声もつけ、作業所での仕事のことや休日に練習を重ねてマラソン大会に出たこと、神戸どうぶつ王国やブルーベリー狩りに行ったことなど充実した日々について報告がありました。(今年度の身体障害者スポーツ大会に参加したときのメダルも披露いただきました。)



### 4. 私の高校生活

田中 凜 氏

学校生活のことについてをメインに喋ります。主に授業のことを中心に話していきます。私は話すことが大好きなので、リレートークで話すことがとても楽しみです。パワーポイントも自分でつくっています。

【事前に本人が作成した紹介】

当日は、本人が作成したパワーポイント（初めて作ったそうです）を使いながら、高校生活の様子について報告の後、自分で録画した「旅立ちの日に」の弾き語り動画の披露もありました。

### 5. 令和5年度文部科学省委託事業「特別支援教育に関する実践研究充実事業」(盲ろう児を担当する教師に対する研修の在り方) 概要

筑波大学附属学校教育局 雷坂 浩之 氏

「盲ろう児を担当する教師を対象とした研修プログラムと指導支援システムの開発研究」をテーマとして、研修プログラムの開発と活用、盲ろう幼児児童生徒を担当する教員の指導力等の向上に寄与できるようなシステムの構築と日常的な支援体制構築を目指して委託事業に取り組んでいる。

(本事業に係る研修ニーズ調査等の協力依頼もありました。)

## 講演概要

### 盲ろう者を取り巻く医療の現況

盲ろう教育と医療機関におけるロービジョンケア —教育と医療の連携—

杏林大学医学部付属病院アイセンター

ロービジョンルーム担当 視能訓練士

新井 千賀子 氏

### 1. はじめに 自己紹介を兼ねて

国立特別支援教育総合研究所を退職したのが2005年で、この秋で18年が経つ。研究所では、視覚障害教育研究部に在籍していたが、重複障害と盲ろうを専門とする中澤先生には多くの障害のある子どもたちのことを教えていただいた。特にコミュニケーションの重要性を勉強させていただいた。それが私にとってその後の障害がある子どもたちと関わる視点をつくる基礎になったと感じている。



杏林アイセンターに異動後は、ロービジョン（教育では弱視）の患者さんを中心にケアを提供している。杏林アイセンターは、東京都の郊外にある杏林大学院内にある日本で初のアイセンターで、11の専門外来がある大きな眼科で、ロービジョンケアは専門外来の一つである。

視能訓練士は、眼科検査や視能訓練、ロービジョンケアなどを行う国家資格で国家資格になって50年が経過し、有資格者は14,000人程度、医療職の3%ほどである。

今回は、私が現在関わっている杏林アイセンターロービジョンケア、そこで経験した教育との連携、そして、視覚と聴覚の両方の障害をもつ患者さんから私が学んだことを報告する。そして、そこから今後につながる課題と未来について皆様と共に考える時間となるとよいと考えている。

### 2. ロービジョンについて

ロービジョンとは、視力が低下してよく見えない状態である。視神経、角膜、網膜など様々な原因でぼやけて見えない、視野が狭くて見たいところが見えない状態、この二つが複合するとどうなるか、ぼやけた状態のところ視野の狭さがあるといった状態になる。それから、コントラストの感度低下で、色の濃淡が分からないといったことも生じてくる。ロービジョンは、これら様々な視機能の低下が複合している状態であり、一人一人異なっている。この一人一人違う状態に対応するということに難しさがある。

ロービジョンケアは、視機能が低下して困り感を持っている患者さんに生活の工夫や改善を支援する、有している視機能を十分に活用できるようにすると

いったことをしている。現在、私は0歳から97歳まで対応している。高齢化社会を反映して、85歳以上の方が多。医療機関での提供は見え方の調整をする、光学的補助具、たとえば眼鏡、拡大鏡、ICTなどの検討が中心になる。ロービジョンケアについては、2000年以降に急速に活発化し、近年は各都道府県に、眼科医療と視覚障害福祉・教育サービスとの連携ネットワークも生まれてきているが、発展途上の段階である。小児ロービジョンケアは保護者のサポートをしながら、成長発達の支援をしていく視点が大切である。見え方の変化もあるし、それぞれの成長段階において視機能を最大限に引き出すこと、支援機器の活用も考えていく。

### 3. 眼科医療について

急速に進歩し、中でも検査機器は広角眼底カメラなど画像が多くなってきている。たとえば、網膜は10層あるが、自分自身の網膜の断層写真が撮れるようになってきていることで、病気の状態がわかり、診断と治療技術が進歩してきている。また、薬剤も進歩してきている。こうした中で、新たな治療法、再生医療、人工網膜、遺伝子治療などの取組が進んできている。

現在、ロービジョンの人は、全視覚障害者164万人の9割程度、全く見えない人の10倍以上と推察している。また、超高齢化社会の中で、ロービジョン外来の患者さんが増加している。

これら、検査機器・薬剤の進歩、治療の進歩、新たな治療法、超高齢化社会といったことから、失明の減少と見えるけどよく見えないというロービジョンの人口がさらに増えていくことが予想できる。未熟児網膜症の治療法も変わってきているし、医療の世界はどんどん進歩している。これに伴って、ロービジョンケアの重要性が増し、外来部門が増えてきている、また、各都道府県単位でスマートサイトなど連携も進んできている。

### 4. 視覚障害と聴覚障害が重複するとどうなるか

眼疾患と聴覚障害が合併している病気として、アッシャー症候群、CHARGE症候群、ウォルフラム症候群、未熟児網膜症など、また高齢になり、眼疾患に老人性難聴が重なるといったことも同じような状態が生じる。

2013年3月から2017年8月までの54カ月の統計ですが、杏林アイセンターでロービジョンケアを受けた患者さんの難聴合併者数は、患者数全体の3.38%だった。先天性疾患・網膜色素変性症との合併疾患、加齢性の難聴との合併、もともと聴覚障害がある状態で眼の病気にかかった例などが挙げられる。このように、ロービジョンケアを受ける患者さんの中にも盲ろう、視覚聴覚二重障害の方が存在している。

進行性の眼疾患に聴覚障害が重なった場合、情報を集める感覚器について視覚と聴覚から触覚に移行していくことも必要になってくるが、単に視覚障害のケア+聴覚障害のケアということではないだろう。視覚、聴覚、どちらかの機能を失わないうちにコミュニケーションツールを検討するということが大切になっている。子どもの場合は、視機能低下によって生じる成長発達の阻害の抑制をどうしたらよいかの具体はとても難しい。ただ、大事なことは視覚、聴覚などのアセスメント、どの感覚をメインに発達支援をしていくか、どの感覚をどの概念

やコミュニケーションに活用していくか、ということが大事であると思う。それぞれの子どもたち一人一人が違うので、カスタマイズしていくことが必要なことであると思う。

## 5. 教育との連携

眼科医療と教育の連携については、理想としては、眼科医療の立場から障害の発見、疾患の見通し、障害に対応した十分な視機能評価、障害に関する周辺領域を含む情報提供ができること、そして教育の分野においては障害に対応した発達成長への影響度の評価、機能的な視機能の活用度の評価、専門的な見通しといったことができ、連携が取れることであろう。

そして、視覚障害とその他の障害（知的障害や聴覚障害など）がある場合に、各専門領域の評価を共有して総合的にどういった支援が必要なのか、教育関係者と本人（保護者）と一緒に協議する場があればよいと考えている。

さらに、連携するためには、それぞれが十分な専門性を持っていること、互いの専門領域を尊重できること、相手の専門領域の内容を知っていることが大切ではないかと思う。

共に、子どもたちの未来のために頑張りましょう。

## ●第21回定期総会報告 【8月5日（土）】

オンラインにて実施いたしました。総会議案につきましては、会員の皆様に事前に議案書を送付し、以下の案件の検討をいただきました。

事前に34名の会員の方から委任状の提出があり、当日は28名の方の参加をいただき、規約に則り、第1号議案から第6号議案まで全て承認されました。なお、第6号議案にて承認された役員は以下の通りです。どうぞよろしくお願いいたします。

|          |               |
|----------|---------------|
| 1. 第1号議案 | 2022年度事業報告（案） |
| 2. 第2号議案 | 2022年度会計報告（案） |
| 3. 第3号議案 | 2023年度事業計画（案） |
| 4. 第4号議案 | 2023年度予算（案）   |
| 5. 第5号議案 | 規約の一部改定について   |
| 6. 第6号議案 | 役員改選について      |

### 【新役員等の紹介】

会長 雷坂 浩之（筑波大学附属学校教育局）  
副会長 上田 淳一（社会福祉法人 新潟地区手をつなぐ育成会  
あすなろ福祉園）  
柴崎 美穂（東京都心身障害者福祉センター）  
星野 勉（NPO 法人わくわくわーく）  
事務局長 星 祐子

会計 小野 彰子（東京大学バリアフリー支援室）  
会計監査 左振 恵子（帝京平成大学）  
森 貞子（盲ろう児とその家族の会 ふうわ）

事務局員 加藤 敦（国立特別支援教育総合研究所）  
亀井 笑（筑波大学附属視覚特別支援学校）  
塚田 直也（筑波大学附属視覚特別支援学校）

顧問 中澤 恵江（前全国盲ろう教育研究会会長）

### 【新会長の挨拶】

会長を仰せつかりました雷坂です。まずは、中澤恵江先生の会長を辞したいという意向について大変残念な思いで受け止めたこと、そして今まで20年来、会長として当研究会に貢献されてきたことに対して心から敬意を表したいと思います。

私は、研究会発足時から、ホームページや毎回の研究協議会開催等に関わってまいりました。とは言いましても、あまり研究会に貢献できていなかったのではないかと感じております。

このたび、会長を受けるに当たっては、運営委員や事務局のメンバーの協力をいただきながら、頑張る所存です。会員の皆様におかれましても、これまで以上にご支援ご協力の程どうぞよろしくお願いいたします。



## ◆運営委員会・事務局より◆

- オンライン配信による研究協議会にご参加いただいた皆様、お忙しい中、ありがとうございました。今後もオンライン配信やホームページ掲載等、さまざまな形で情報発信や情報交換を行っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。
- 会費納入のお知らせ
  - ・年会費（2,000円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたら、どうぞご容赦ください。
  - （例）「2023未」：2023年度分未納を表しています。

- ・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。ただし、過去に未納の年度がある場合は、過去の年度分として領収させていただく場合がありますので、どうぞご了承ください。

◇振込・振替先（みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい）

みずほ銀行 本郷支店  
口座番号 普通預金 8062806  
口座名義 全国盲ろう教育研究会会計

ゆうちょ銀行  
口座番号 00100-6-484136  
加入者名 全国盲ろう教育研究会

- 住所（会報等送付先）、メールアドレス等の変更については、事務局までご連絡ください。ホームページに、登録情報変更届の用紙がありますので、ご活用ください。なお、メールを活用し、情報をお伝えすることを進めてまいりますので、まだメールアドレスを登録されていない方は、事務局にご一報いただけますようお願いいたします。



**第22回研究協議会は以下の日程で集合型にて開催予定です。**

**日時：2024年9月21日（土）・22日（日）**

**場所：筑波大学附属視覚特別支援学校（東京都文京区）**

**\*講演・実践報告等、全体企画についてはオンライン配信も予定しています。**

猛暑の時期を避けての開催といたします。

皆様には、開催時期や開催方法等についてのご意見・ご要望をお寄せいただきまして、ありがとうございました。

多くの皆様の参加をお待ちしております！